
セッション4. 人材

1) 救出活動

専門的技術と判断力；人材の活用；育成

コーディネーター	岡田 健	東京文化財研究所
討論者	加藤 幸治	東北学院大学
	菊地 芳朗	福島大学
	高橋 修	茨城文化財・歴史資料・救済保全ネットワーク準備会（茨城大学）
	八木 三香	文化財保存支援機構
	山田 格	国立科学博物館
	米村 祥央	東北芸術工科大学

セッション趣旨

今回の救出活動には、広範な領域から夥しい数の人員が参加して実施されました。活動は、直接被災文化財に触れる運び出し、応急処置を実施する救出作業、人員・資材・文化財資料の運搬作業など、被災地での作業と、それを計画し、人員、資材、車輛等の機材の配置決め、一時保管の場所やその手前での洗浄作業のための場所を確保するためのいわば後方での活動など、多岐にわたり、多様な人材とその能力が求められました。もともと緊急時の確固とした体制がなかった状況において、個別に独自の能力を発揮して大きな成果を挙げた組織や専門家がいたと同時に、専門性を度外視して緊急の作業に参加した人たちも多くいました。水濡れ・カビや錆の発生・部分の欠損脱落などに対して文化財保存や文化財修復の立場から参加した人たち、歴史・考古・美術史等の人文的研究領域から参加した人たち、事務的な作業に従事している人たち、学校教育の立場から参加した先生とその学生たち、さらに日常的には文化財と直接接点を持たないボランティアの人たち。

多様な人々の参加を振り返り、それぞれの人たちにとってのレスキュー活動参加の意味と、今後の課題について議論したいと思います。

アンケート

1) 具体的にどのような救出活動を、どのような人材によって行ったか

◇ 岡田：

< 救援委員会事務局運営（1年目）>

体制：東文研単独での事務局担当。委員長（所長）・事務局長（副所長兼保存修復科学センター長）・副事務局長（同副センター長）・補佐役（同センター主任研究員）・事務総括（研究支援推進部長）を置き、事務局内に会計経理班（支援推進部管理室長）、活動支援班、情報分析班、記録班、広報班の5班を置いた。会計経理班以外の4班はいずれも研究職を主任とした。また、事務室を設置し、物資調達・人員派遣等あらゆる内容の事務処理を行った。東文研の管理部門各担当は基本的に本体業務に専念し、

レスキュー事業には関与しない体制をとった。

会計処理：文化庁長官の呼びかけにより財団法人文化財保護芸術研究助成財団に集まった募金・義援金からの助成金は、独立行政法人国立文化財機構本部の会計担当の管理となったため、機構本部との連携により当該助成金の処理を行った。

<事務局運営（2年目）>

体制：東文研と東博の共同による事務局担当となった。新たに副委員長（東博副館長）、事務局長（東博研究学芸部長、東文研保存修復科学センター長の2人）の他（副事務局長を廃止）、東博2名、東文研1名、文化庁2名を加えた体制をとった。

<東京文化財研究所>

現地派遣の体制：事務局担当機関として、現地本部（仙台市博物館）担当、救援活動の現場作業等へ率先して人員を派遣した。この場合、本人の専門性に合わせた派遣、まったく専門を度外視した派遣の両方があった。また岩手県における陸前高田市立博物館所蔵美術作品救出と応急処置に係る約3カ月間の活動、福島県における警戒区域文化財救出活動準備に係る約3カ月間の活動には専従者を充て、県教委・参加各団体・所蔵者等との連絡調整に当たさせた。39名の定員常勤職員に対して、約9割が現地に出動した。

- ◇ 加藤：石巻市鮎川収蔵庫では、現地でのレスキューには、救援委員会メンバーのほか、東北学院大学、新潟史料ネット関係者、有志の学芸員らが参加しました。現地の作業には危なすぎて学生や大学院生は参加させませんでした。

レスキューした資料を大学に運び込んでからは、本学大学生のほか、他大学からのボランティアなど、加藤の指示のもと学生・院生主体で作業を続けてきました。

一年目は、泥落としの一次洗浄、二年目はより安定化を目指した二次洗浄とそれを展示して民俗資料のバックデータを作成する聞き書き調査を進めています。

次年度は、脱塩や二酸化炭素殺虫処理を学生が行うほか、台帳整備やバックデータ作成の継続を行う予定です。

- ◇ 菊地：

- ・震災発生後約1カ月から開始したふくしま史料ネットによる緊急文化財レスキューにあたり、ボランティア（登録・非登録ともに含む）の一人として活動した。この活動は今も続いているが、特に震災後半年あまりの間は非常に大きな役割を果たした。
- ・平成24年度は、個人的には放射能汚染地域内文化財の搬出活動と、今後の検討が主体となった。この活動は「福島県被災文化財等救援本部」という多団体組織で実施されるものであり、福島大学としては歴史・自然史系教員計6名で活動した。また、これにあたり、指導する学生たちにボランティアとして参加してもらった（セッション3-1資料参照）。

◇ 高橋：茨城史料ネットでは、茨城県内から福島県南部、栃木県東部にかけての地域において、地震で損壊した旧家や、津波で被災した寺院等から、文化財・歴史資料の救出と保全、整理を行ってきた。活動は、茨城大学の大学院生と学生が中心となり、規模の大きなレスキュー活動には、メールニュースを通じて、広くボランティアの参加を求めた。また県外の活動は、千葉や神奈川など、近県の史料ネットとも連携して、ボランティアに拠る参加者を募っている。

◇ 八木：

- ・ H23.04.26 JCP副理事長が、宮城ネットの要請で岩手県の旧家の屏風、襖の救援に赴く
→その後、京都造形芸術大学との共催「文化財ER」事業に発展
ボランティアを公募して土日に活動
- ・ H23.6.30～7.1 救援委員会委員 東京国立博物館保存修復課長の要請を受け、陸前高田市立博物館被災文化財事前調査に参加。
→登録会員^{*1}（装こう修復技術者） 1名。事務局 1名
※1 専門性を有し、JCPの活動に参加協力をする意志を持つ個人会員
- ・ H23.07.19～21 救援委員会委員、東京国立博物館保存修復課と共に、陸前高田市立博物館被災文化財の保存処置仕様立案のための調査に参加。報告書として処置案提出。
→登録会員（装こう修復技術者、埋蔵文化財修復技術者、紙本修復技術者1名）
- ・ H23.12.14～26 陸前高田市立博物館の被災した拓本掛け軸の塩分除去と安定化処置作業（第一次）
→登録会員 9名。延べ人数60名
- ・ H24.01.10～23 拓本掛け軸塩分除去と安定化処置作業（第二次）
→登録会員 6名。延べ人数55名
- ・ H24.02.8～27 拓本掛け軸塩分除去と安定化処置作業（第三次）
→登録会員 7名。延べ人数48名

◇ 山田：

<救出標本>

A. 陸前高田市 海と貝のミュージアム

ツチクジラ剥製標本

B. 石巻市鮎川 おしかホエールランド

ツチクジラ胎児 液浸標本（10%ホルマリン?）

カズハゴンドウ（10%ホルマリン?）

不明組織（10%ホルマリン?）

<標本の価値、救出の意義>

ツチクジラ剥製標本（陸前高田）は、国内唯一の10mクラスの鯨類剥製（頭骨は国立科学博物館に保存）。鯨類剥製作製の技術史的な価値もある。鮎川の液浸標本はいずれも再度製作するのは容易でなく、同施設再開に備えて保存しておくべき。

活動内容

◀陸前高田▶

H23.05.28-29予備調査、仮設台車に移動。06.28-29国立科学博物館筑波地区の収蔵庫に移動（燻蒸、補修）

◀鮎川▶

H23.06.10 予備調査、標本転数確認、06.29国立科学博物館の液浸タンクに移動

参加者

自衛隊、岩手県内博物館職員、国立科学博物館職員、展示業者、医科理化機械業者

◇ 米村：

- ・津波で流されたのちに現地で回収、本館されていた南三陸町寺院の仏具などについて、乾燥促進の処置を実施した。文化財保存修復研究センタースタッフで実施
- ・石巻文化センター所蔵の美術品について
宮城県美での応急処置作業（文化財保存修復研究センタースタッフを派遣）
作品の一時預かりにおいて、応急処置作業（スタッフの指導により学生が実施）
- ・宮城歴史資料ネットからの依頼で、個人宅の扁額・屏風を応急処置した。また一部は本格的に修復を施した。（スタッフの指導により学生が実施）
- ・宮城県内や陸前高田市より図書資料を受け入れ、応急処置（真空凍結乾燥やクリーニング）を実施。（大学スタッフ、学生、山形文化遺産防災ネットとの協働作業）

2) 救援活動にはどのような人材が求められるか

- ◇ 岡田：救援活動全体をマネジメントする場合には、高度な原則性と柔軟かつ果敢な判断力（状況を正しく判断し、原則に固執することなく、的確な判断を出せる能力）、そして実行力を持つ人材が必要である。災害の規模が大きく、参加する人員が多様になるときは、情報収集と調整能力を持った人材が求められる。
- ◇ 加藤：鮎川収蔵庫は、資料点数の多さや破損のひどさがあり、人海戦術での作業が求められました。技術はないがやる気のある学生たちは、本当によく作業をした。それ自体が訓練でもあり、そこから巣立った人材がすでに東北の博物館に学芸員として入り始めています。次の災害の時に活躍できる人材をつくることも、大学の責務と考えています。
ただ、指示者・管理者が私ひとりで、学生は数十人いるので、情報伝達メディアとしてカルテを作成して使用しました。
作業の中からわかったことは、カルテは作業の振り返りにもなると同時に、私の指示の傾向を理解することもできるので、実は素人の学生の側に、さまざまなノウハウが蓄積されていくこと。現在では、これとこれをクリーニングして、という指示だけで、学生たちは一定の判断のもとで作業を展開することができます。
- ◇ 菊地：
 - ・基本的には、文化財への関心と愛着をもつものであれば、年齢や職業等は問わない

と考える。

- ・一方で、指導的立場にあたるものは、価値判断や危険判断が必要となる場面がしばしば生じ、極端なばあい生命の危険に向き合うことになるため、「好き」や「情熱」だけでは務まらないことを、今さらながら重く実感するにいたっている。
- ・震災関連の数々の文化財レスキューで得られた正負の知識・経験を、正しく学んだ文化財担当者およびその候補生。

◇ 高橋：大規模な文化財・歴史資料の救済には、さまざまな役割が求められる。専門的な古文書判読や保存処理ができる人材もちろん必要だが、買い出しや資材の運搬に走り回る役割を負う者も必要である。その意味では、「どのような人材」ではなく、その場に集まった人間の能力を組み合わせ、現場の活動力を高めるコーディネートの方が重要になる。言い方を変えれば、災害対応のレスキューでは、その場に集まることができた人間で、できることをやるしかない。

◇ 八木：適材適所を考慮することでどのような人材でも様々な貢献が可能と思うが、その際にはコーディネート能力が必要と考える。さらに現場では、状況の判断ができ、意思決定するリーダーの存在が不可欠である。たとえば陸前高田市立博物館の被災資料の運び出しに協力してくれた自衛隊のように、知識がなくても機動力で大きく貢献できることもあるが、専門家の指揮があってこそその成果であったと聞いている。

JCPの場合で言えば、会員は、専門家で構成される「登録会員」、専門性はないが文化財に興味を持つ「一般会員」に大きく分けられる。また寄附会員である「賛助会員」も、専門性を持つ法人、個人が多い。さらに専門家を目指して勉強中の学生会員も多数所属している。震災直後には、どの会員層からも一様に「何かさせてほしい」というメールを頂いた。今回は要請された内容が専門技能を要するものであったため、現地で行動した人材は「登録会員」が主となった。登録会員には入会時に専門性を登録してもらっており、信頼性に足る技術者／専門家を選定して現場に向かってもらった。付け加えるならば、現場で必要とされるのは技術や知識もさることながら、やはり協調性、人間性が大切である。

一方、一般会員、賛助会員も寄附の面では大きく寄与して下さり、また多くの修復資材を提供していただいた。

どのような人材も大切であり、こうした「想い」を活かす仕組みを考えていかなければならないと思う。

◇ 山田：

<求められる資質>

標本（文化財）の価値などの十分な理解

標本（文化財）の取扱技術などの十分な経験と理解、それに伴う判断力

現地の状況下で対応できる柔軟性

救援活動全体の枠組み内での位置づけの理解

- ◇ 米村：文化遺産に触れた経験のある者が望ましいが、指揮をとれる人材がいることの方が重要であろう。指示者が複数でしかも意志の統一がされていないと現場が混乱する。

3) 問題点

- ◇ 岡田：本来文化財研究（文化財の材質・技法に関する研究、歴史と表現に関する研究、無形文化遺産に関する研究等）を任務とする組織においては、委員会の運営や現場作業の実施に関して日常業務としてこれに精通し、いざという時に直ちに体制を作るための準備がなかった。救援活動の運営が、その時に在籍するヒトの経験や能力に依存するという事では、災害が発生するたびに一から作ることが繰り返される。

- ◇ 加藤：私の当初からの考えは、文化財レスキュー活動がプロにしかできない仕事にしてはいけないということ。もちろん保存処理や資料の保全作業に優先順位を付けるなど、専門的な知見のもと作業は行われるべきであるが、実際の作業は、訓練をすれば学生でもできます。私は、今後被災地の一般の方々の中かで、被災前に公民館活動や文化活動に積極的に関わっていた人たちや学校の先生などと一緒に仕事をしたいと思って下準備をはじめています。

というのも、一定の保管期間を経て、コレクションは地域に返されます。そのときに地域の人々が返却までのプロセスにまったく関わっていないと、いずれ死蔵されることは目に見えています。特に民俗資料や考古資料についてそれは言えます。

専門家が資料を持って行って、どこで何をしているかわからないかたちで処理をして、それがいきなり地域に戻ってきて、それを活用してくださいと言われても地域の側はこまってしまうでしょう。

- ◇ 菊地：
 - ・史料ネットに関しては、特定の人物（事務局長・事務局員）の日常的な負担が大きく、また活動が参加メンバーの仕事の有無に左右されること。
 - ・自治体での救出活動に関しては、「人（担当者）」と当該自治体の文化財保護の姿勢に大きく左右される結果となっていること。
 - ・教育機関（大学）が、有為な文化財担当者候補生をどれだけ多く育成できるか（座学にとどめないこと）。

- ◇ 高橋：災害時に、県や市町村、博物館、大学、といった立場を越え、様々な職務や専門分野を持った人材が、集まれる組織作り、環境整備が必要であろう。前提として、何を文化財、歴史資料と認識し、どこまで救出すべき対象とするか、コンセンサスを形成しておくことも必要である。

- ◇ 八木：文化財の救援は待ったなしであり、緊急時に安定的に人材を供給することが理想である。その課題解決方法のひとつがNPOという形かもしれないが、現実的にはやはり難しいことに変わりはない。会員は様々なバックグラウンドを持っており、時

間的、経済的、組織的な制約に縛られている。特に長丁場の活動の場合、ひとりひとりの状況を考慮したコーディネートが求められる。究極的には人のための文化財救援であり、救援する側が疲弊してはならないと考える。そのためにはボランティア休暇の導入など、社会全体で考える必要がある。

- ◇ 山田：今日的な「責任回避型」の消極的な対応・・・「責任がとれないから、頑張らない」
 - 海拔〇〇m以下の土地には建築物をつくらない
 - ← むしろ頑丈な建造物において避難機能をもたせる救援側の判断、構想と現地の実情の齟齬が生じうる
 - 救援標本をいつ復帰させるか

- ◇ 米村：今回のように大規模な災害の場合は、ボランティアとしてのみ作業時間をアレンジするのは困難であった。専門分野の機関といえども通常業務もあるので思うように進むことが出来なかった。思わぬ大きな支出（使用機器の故障など）が発生した際への対応に苦勞した。

4) 問題点を解決するためにどのようなことに今後取り組むべきか？

- ◇ 岡田：危機管理・救援活動・応急処置に精通した人材を配置した組織を作ることが必要である。ただし、それがどのようなジャンルを念頭におき、誰によって、どのような経費によって運営されるものであるか、という問題は容易には解決できない。既存の枠組みを超えた発想が必要であるが、誰がそれを引き受けて推進するか、という事についての広範な議論と、高度な決断が必要である。

- ◇ 加藤：長期的な関わりしかないと思います。
 - レスキューした資料を、返却前にさまざまなかたちで地域の方にお見せして、活動の過程をしってもらい、それが戻ってきたときに何ができそうかを提案することが大切ではないでしょうか。たとえば、私たちは「文化財レスキュー展」を被災地の石巻市鮎川の被災した公民館と、仙台市内の文化施設で開催し、400人を超える人々に、民具を見てもらいながらの学生との語らいに参加してもらいました。これは返却予定の二年後まで、三年間にわたって行う予定です。
 - その展覧会を通じてレスキューした資料について知ってもらい、その資料の返却後も、生涯学習活動をアウトリーチのかたちで現地で展開したいと思っています。コレクションをもとにあらたな地域の魅力発見につながるような活動を提案していき、いずれは地域にその主体をわたしていければと思います。
 - レスキューして、きれいにして返して、ハイさようならではなく、震災をきっかけに文化財やコレクションの魅力が再発見されていくことに、どうしたら関われるか。さまざまな実験的な博物館教育活動や文化財の普及活動が、あちこちで展開されるといいと思います。

- ◇ 菊地：
 - ・ ふくしま史料ネットのNPO化は当面は困難。登録ボランティア数を増やす一方、事務局の負担軽減のための組織の見直しが必要。その意味で、活動の周知による市民からの理解と協力が不可欠。
 - ・ 今回の全国規模での文化財救援活動を、一般市民に広く周知すること。
 - ・ (個人的には) 大学のゼミ・講義・実習で文化財救援活動を取り上げ、それが大きな意義をもつ活動であることを伝えるとともに、活動参加を促す。それが有為な人材の育成と供給につながる。
 - ・ 博物館学関連講義 (特に「博物館資料保存論」か) で、救援活動における保存科学分野の重要性を強調するとともに、活動の際に生じる様々な健康被害の恐れを知らしめること。
 - ・ 国あるいは都道府県として、「文化財救援活動リーダー養成講座」のようなものを開催できないか？

- ◇ 高橋：まずは地域防災計画等の中に、被災した文化財の保全のために、管轄や指定の枠を越えて動き出せる体制プランを盛り込みたい。何らかのオーソライズされた共通認識が必要である。また県・市町村の文化財担当者と、史料ネットのようなボランティア組織が、席を囲んで意見や情報を交換できる場を設けたい。

- ◇ 八木：
 - ・ ボランティアリーダーの育成
 - ・ 日頃からの情報交換、技術交流
 - ・ ボランティア休暇の普及
 - ・ 各地域の専門家とのネットワーク構築

- ◇ 山田：標本 (文化財) を救出した側は、地元でそれらを収容できる文化施設の再建への動きを支援する？

- ◇ 米村：災害時に活動ができる機関同士の連携強化。
 - ・ 職場内における明文化など、業務として活動できるようにしておくことが必要。

討 論

岡 田 人材に関するセッションの一つ目は、現場での救出活動に当たる人材ということになります。



構成団体ということで申しますと、このセッションで壇上にお登りいただいたほとんどの方は救援委員会構成団体の所属ではございません。今日はいろいろな立場からのご参加をお願いして、レスキュー活動は一体どういう人たちによって行われたかということを整理してみます。文化財等は文化財保存の専門家や修復の専門家など、これはなかなか限定されたジャンルになるわけですが、そういった専門家の方々や、あるいは自然史系、生物系の資料を制作したり修理したりしている専門家の方、中には業者の方もいらっしゃるかもしれません。

歴史学、考古学、美術史学、民俗学、生物学、地質学などを専門とする研究者、あるいは博物館の学芸員、研究員、そして大学の先生といった方々が沢山参加されました。この方々は、その分野の歴史的な、あるいは体系的な研究が主で、文化財資料としての保存処置や修理の技術・知識を持っていらっしゃる方もかなり含まれています。

大学の先生が活動する中においては、大学教育の一環として実施されることがありますので、その先生の学生さんたちが参加されたということがあります。それから、先ほども気仙沼市での活動で市民の方の参加の話がありました。緊急雇用という形で参加された方もありますし、一般のボランティアとして参加された方々もありました。そういった方々は専門家ではないけれども、今回、こういった震災が起きたことによって、自分には何ができるだろうかという思いで、活動に参加された方もあり、震災をきっかけにして、あるいはもともと文化財に関心があったのでということで参加された方々もいらっしゃると思います。

もちろん運搬や梱包、あるいは解体や燻蒸などを行う業者の方々もいたと考えています。今日お集まりいただいたのは大学の先生方、そしてNPO団体の方、博物館の研究員の方です。

ここからのお話は、第一にこういった活動に参加して現場での救出活動を行うに当たっての、技術的な課題についてお話ししたいと思っています。今日の午前中の話の中にも、初めは経験がない人たちも、だんだんに仕事を覚えて技術を身に付けていったということがありました。技術的な課題ということに関して申し上げますと、本当に多岐にわたる内容がありました。特に、今日は大学の先生にもお集まりいただいていますので、そこから考えられる人材の育成、あるいはトレーニングといったテーマについても話を進めていきたいと思っています。まず、それぞれのご専門の立場から今回のレスキュー活動に参加されたわけですが、ご自身がどのような救出活動に参加され、技術的な面でどのような作業を行って、どういう人材を活用したかということについて、順番にお話をちょうだいできればと思います。

加 藤 東北学院大学では、救援委員会との関係で言いますと、大学博物館が一時保管施設として、牡鹿半島のほぼ突端にあって、津波の直接的な被害を受けた石巻市鮎川収蔵



庫の考古資料、民俗資料、一部地学の資料を一括で受け入れました。

大学博物館で受け入れたといっても、博物館のスタッフは私も兼任ですし限られております。当大学は歴史学科を持っていて、民俗学のコースがあります。東北の特徴なのでしょう、民俗学のゼミ生が多いのです。そうした中、今回の大変な被災を受けまして、学生も私自身もある部分で被災者です。被災者自身が取り組むレスキューは、どこまでできるのだろうかという試みでもあると思っています。特に、学生が学生時代にこういった活動に参加しておくことそのものの重要性もあると思っています。私も阪神・淡路大震災のときに大学生で、文化財のことではないですが、1年間、ボランティアを一生懸命やっていました。今回動きはじめるときに、そういったものもどこかで下地になっていたところがありましたので、学部生に関しては、経験させたいという思いがありました。ただ、もちろん心理的な影響が非常に懸念されましたので、現地の作業には一切関わらせませんでした。大学に資料を運び込んで作業するということが前提でした。

石巻市鮎川収蔵庫は、最終的には石巻文化センターの所蔵品に統合される予定です。ただ、被災したときは、民俗資料の特徴なのですが、1カ所の現場の点数が多い、かさばる、素材が複合的とか、とにかく人海戦術でやらないといけないことは予想がつきました。その人海戦術ということと言いますと、私は大学に勤める前、和歌山県の博物館施設におりまして、市民を募って民具を整理して、それを県指定有形民俗文化財にもっていくという活動をずっとやってきました。

素人ができる仕事は、民俗資料を整理する作業の中で確実にあるのです。もちろん、それは学芸員的な技術を持った人間が監督をしてという前提ですが、素人でもできること、素人だからできることがあると思ってきました。今回も同じ思いがあって、学生からできることがあるのだと思って、人海戦術で当たらないといけない現場を担当すると、こちらからも申し出た記憶があります。

本学の学生だけではなくて、ほかの大学からもボランティアを受け入れまして、東京の大学を含む10以上の大学から学生が来てくれました。夏休みに何回も足を運んでくれた学生もいます。ただ、制約もなくオープンに公募するという形は取りませんでした。初めはよく知っている先生に派遣してくれるようお願いをして、できるだけ顔が見える形での募集をかけて作業に当たりました。被災地の学生にとっては、ほかの大学の学生と一緒に仕事をする事自体が、震災当年の状況の中では非常に必要なことでもありました。

全体の規模としては、民俗資料は500件で、点数にすると恐らく3,000~4,000点、基本的にばらばらに壊れている資料です。これをクリーニングして、来年度もこれを続けて、脱塩などのちょっと踏み込んだ作業も大学で行っていく予定です。

また、文化財レスキュー展を開催して、津波の被災地の石巻市鮎川、それから半島部からたくさん避難されている方がおられる仙台市内で、民具を並べて学生がそこで聞き取り調査をする。資料のバックデータを復元していくこと、プラス、震災後の今の時点で、人々がそういったものを前にして、どういうことを語ってくれるのか、そんなことを聞き取りするという試みを始めています。

岡田 菊地さんお願いします。

菊 地 今回のテーマに関わる活動としては大きく二つありまして、一つは、いわゆる文



化財レスキューの活動で、もう一つは、午前の討論のテーマにもなりましたが、原発事故警戒区域内の文化財救出に関わる活動です。後者は特に今年度になってからの活動ですので、まずは前者の文化財レスキューの話からしたいと思います。

福島県では、神戸や新潟、宮城などの経験を受けて、平成22年11月に「ふくしま歴史資料保存ネットワーク(ふくしま史料ネット)」が誕生しました。設立のとき、実は私は在外研究のため日本におらず、直接設立には関わっておりませんでした。震災を受けて帰国しまして、被災文化財の状況がかなり深刻であることが分かってくるにつれ、史料ネットの体制がまだ十分整わないけれども、とにかくまずは動かなければいけないということで、3月末ぐらいから史料ネットの活動を開始し、私が仮の代表になりました。

その活動は現在も続いているわけですが、特に震災発生直後の数カ月程度は、行政が機能するのがかなり難しい状況でしたので、ボランティア組織である史料ネットは、機動的に動けるという意味で大変大きな役割を果たしたのではないかと考えています。史料ネットの活動の対象は特に制限はなく、いわゆる歴史資料—その後は自然史資料も加わりましたが—を中心に、広く救出活動を行ってまいりました。

ふくしま史料ネットは、平成22年から登録していた社会人のボランティアの方々を中心となって活動をしており、その段階では、一私は大学教員であるわけですが—学生には加わってもらいませんでした。福島特有の放射能汚染の事情があったからです。野外で若い人たちを活動させていいかという問題が明確ではなく、学生に積極的に声を掛けることは控えた方がいいだろうということで、主に社会人のボランティア中心で活動を行ってきました。

今年度になってから、史料ネットの活動がある程度落ち着きを見せてきたこともあり、私の専門が考古学で、必ずしも史料ネットの活動とそぐわない部分もあるため、代表については、同じ大学の阿部浩一さんをお願いし、私は原発警戒区域の活動へと徐々に中心を移していきました。史料ネットの活動は現在も続いており、大きな役割を果たしていると思います。

原発警戒区域の活動に関しては、午前中に話したとおりですが、徐々に福島県の放射能汚染の状況が分かってまいりまして、もちろん危険な場所はまだまだたくさんありますが、計測をしっかりとこまめに行えば、多くの場所が比較的安全であることが分かってきました。そこで、救援委員会等による警戒区域からの資料の運び出しに関しては、私たちは警戒区域外で資料を受け取って開梱するという活動をさせていただき、それには学生にも参加してもらって現在に至っています。

申し忘れましたが、史料ネットの活動は、屋内活動も重要で、昨年度来、屋内での整理作業を行っておりますし、学生にも声を掛けて、参加してもらうことができました。ただし、屋外に関しては、学生に声を掛けたのは今年度の後半になってからでした。

岡 田 津波の地域、それから原発事故の地域と、それぞれ学生さんの活動、参加の仕方にも違いがあって、お二人の参加の仕方にも違いがあるようです。

引き続き、茨城史料ネットの高橋さんをお願いいたします。

高橋 今のお二人の話もそうなのですが、茨城もちょっと特殊な事情があるわけで、そのあたりから説明させてください。茨城の場合は、一つは被災地であるという自覚が非常に遅れたことが大前提です。津波の被害は東北3県に比べればかなり限定的で、マスコミの報道もそうでした。われわれ自身もそのような認識を持っていました。



しかし、茨城も震度は東北3県と変わらず、非常に広い範囲で震度6以上を記録していて、建物被害も非常に多い。国指定文化財の被害件数は、茨城が最も多いという数値も出ています。非常に広域に地震被害が広がっている状況に気が付くことに時間がかかりました。自分たちが文化財に非常に深刻な被害を受けた被災県だと、手を挙げていいのかどうかということに、気が付くのが非常に遅れたのだと、今考えると思います。旧家の被害、そうした地域にある民間資料が、建物の取り壊しと共に失われていく状況に、現在も対処を迫られています。

茨城での活動は、私を中心にして考えた場合、史料ネット設立前と設立後とは、違いがあると思います。私たちは、茨城大学中世史研究会という私の研究室の周辺の間、OBや学生や大学院生で構成している小さな研究会を持っているのですが、3.11の後、比較的早い時期に、状況の調査や小規模なレスキューを始めていました。この段階は、あまり外の人にまで手伝ってもらうことは考えずに、自分たちでできることをやろうと考えていました。ですから、このセッションのテーマである「人材」とはあまり関係なく、自分たちだけでできることをやろうということです。文化財保護の専門家など、さまざまな知識や技術を持っている方たちの応援をほとんど要請することもなく、できることをやっていくという段階でした。

ただ、3カ月、4カ月たっていくうちに、やはりわれわれの自覚も変わりました。外部の方からも茨城の被害も非常に大きいのではないかというご意見もあり、また寄せられる被害情報も増えていきました。そういう中で、もうわれわれの小さな研究室一つと協力してくれる人たちだけで、やっていける状況ではないのだと気が付いて、平成23年7月2日に緊急集会をしました。関係する方たちに広く声を掛けて、県内外の方たちに活動報告を持ち寄ってもらって、県全体の被災状況がどうなっているのかを確認する会を持ちました。

そこで茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク準備会（茨城史料ネット）という組織を立ち上げました。外部へも広く支援を要請していこう、必要なものについては援助をお願いしていこうということになって、活動の方向が少しずつ拡大していきます。その少し前だったと思いますが、茨城県を通じて鹿嶋市からわれわれに支援要請がありました。津波被害を受けた鹿嶋市の龍蔵院というお寺に救援委員会とともに出向いて、確認調査や保全処理等をするという機会がありました。このあたりから活動が外部に広がりました。応援をいただく中で、どういう資料については、どういう人たちにお願いで、どういう技術を持って当たらなければならないのかということ、少しずつ考えるようになったと思います。

ただ、その中でもわれわれは、やはり大学の教員と大学院生、学部の学生が主体になり、日常的にはこの活動に当たらざるを得ないわけです。事務局が置かれています茨城大学の状況は、人文学部の中に歴史・文化遺産コースがありまして、そこに歴史学の教

員が6名と考古学の教員が2名という配置になっています。大学院はマスターまでしかありませんので、現在、歴史関係の大学院生が6名という状況です。

ですから、必要な人材をといても、内部で日常の活動で必要な人材をそろえるわけにもいかないし、また差し迫ったレスキュー等に人材をそろえて当たるといった感覚は、そもそもあまりありませんでした。外部の方たちにも、こういう分野の人が何人要るから来てくれという形の要請など、そこまで計画的なレスキューを行うことはなかなかできません。来ていただいた方たちの専門や肩書等を見ながら、その場その場で能力を十分活かせるよう、計画を立ててセッティングして、それぞれの対象に当たっていくという方式を取りました。

茨城大学のような地方の小さな国立大学は、保存科学もないし、人員的にも8名の教員では限界があります。何ができるのかということ、今後の活動の中でも検討していく必要があると思っています。

岡田 最初に申し上げましたように、活動していたのは必ずしも文化財保存の修理・修復を専門としていた人だけではありません。例えば全国美術館会議の参加メンバーの多くの方々は、恐らく美術史専門の方々であったらうと思います。もちろん、保存・修復の専門の方々が現場でのリーダーという形を取って、仕事の手順を明らかにし、そして打ち合わせを繰り返し、現場をつくっていったこともあると理解しております。

今のお話の中でも、現場の作業には人数を確保しなければいけません、そこでの作業をどのようにするかという技術的な問題も、当然組み合わせとして考えなければいけません。最初に現場の全リストがあれば、シフトを決めて動かせるかもしれませんが、なかなかそうはいかずに、最初はこれ、次はこれと、例えば宮城県などでも、2週間先までを決めるのが精いっぱいという状態で仕事をしていました。

物を移動するための車両の手配、それから一時保管場所、一時保管場所へ入れる前のクリーニングの場所などが、なかなか決まらなかつたりして、せつかく人を決めても現場がうまくいかないというので、作業延期を繰り返すこともありました。

そういった中で、どういう専門を持った方に、ある意味、専門的なところから作業していただくのか、あるいは現場でのリーダーシップをどう取っていただくのか。この場合のリーダーシップは技術的なところが主になるわけですが、私たちにはその道の専門家の方々の参加が大いに必要でした。

八木さんから頂いたアンケートでは、NPO法人文化財保存支援機構（JCP¹）は、必ずしも全部の方が専門家ではないようです。そういう意味では、いろいろな方の組み合わせでNPO法人として活動しているらしいしますので、その辺も含めて八木さんからお願いします。



¹ JCP：文化財保存支援機構の英文名Japan Conservation Project の略。

八 木 私は教育機関の人間というわけではないので、事務局としてマネジメントした立場からお話しさせていただきます。



最初に、JCPの会員種別についてご説明させていただきます。今、岡田さんからお話がありましたように、私どもの会員は大きく四つに分かれています。まず、寄付会員である賛助会員、それから専門性を持ってプロジェクトに参画して下さる登録会員、文化財に興味を持っていらっしゃる一般会員、そして文化財の専門家を目指している学生会員です。

今回、一番活動してくれたのは、もちろん専門性を持った登録会員なのですが、賛助会員の中にも専門性を持っている法人や個人の方が多くいらっしゃいます。特に賛助会員からは、資材的なご提供をいただきました。また、一般会員の方には、事務的なお手伝いをしたいという申し出を多くいただきました。これらの声を活かすのは、ひとえに事務局の力に懸かっていたのですが、それがどの程度までできたかというお話になるかと思えます。

時系列に沿って何をしたかということは、平成23年度の報告書に詳しく書いていますので、そちらを参考にしていただければと思います。まず、申し上げたいのは、震災の翌日に、会員から何かさせてもらえないかというメールが多数寄せられたということです。私どもの会員は、もちろん一つの専門だけということではなく、装こうから彫刻から埋蔵文化財まで、いろいろな分野の会員が存在します。そうした会員から何かさせてくれという声を頂いたのです。そこで、4月2日、緊急的に役員が集まり、今後の対応策を練りました。当方の理事には阪神・淡路大震災のときに対応した経験を持つ理事が複数居り、軽々に現場に入るべきではないということを指摘されました。救援委員会というものがもうすぐできるから、それを待てということでした。会員から何かさせてくれという声に直面している事務局としては、多少辛い時間があつたのは事実です。

一方、当機構には関西支部があります。支部長は副理事長でもある、京都造形芸術大学の大林賢太郎准教授（当事・現教授）で、彼が大学との共催事業として「文化財ER²」というものを立ち上げ、宮城ネットの要請に従って、岩手県の所蔵品の救援に赴くところから少しずつ活動していました。

救援委員会と共に動くことができるようになったのは、救援委員会の事務局でもある神庭課長から声を掛けていただき、陸前高田市立博物館の被災文化財の調査に赴いた6月の末からです。私たちは、実は平成20年度から、東京国立博物館の保存修復課との共催によって専門家を養成するセミナーを開催しているのですが、そのこともあって、神庭先生も当方の会員活用を考えてくれたのだと思います。

その際に同行したのが登録会員です。装こう関係者、埋蔵文化財関係者、それから洋紙の修復家の方でした。この時は調査をし、今後の修理方針を報告書にまとめるという作業でした。

JCPの登録会員には装こう関係者が多いこともあり、年末ごろに再び陸前高田市の被災した掛け軸の安定化処置に協力要請を受けました。奥州市埋蔵文化財調査センターに

² 被災文化財救援プロジェクト：京都造形芸術大学で預かった被災文化財の処置を、作業区分を処置作業（初歩的な修復技術持つ人）、処置作業補助（技術不要）に分けて、学内の学生を募って行ったもの。

移送されていた拓本の安定化処置、塩類除去作業に、腕のいい表具屋さんを含めた装こう技術者、それから芸大などで学んだ紙本の修復家など、通常ではあまり見られない多様な組み合わせでシフトを組んで、3クールにわたって派遣しました。2週間、2週間、3週間ぐらいの期間にわたって、1回につき4～5名、時には6～7名で作業を行い、それが平成24年2月まで続きました。というところで、一旦、救援委員会と連携した作業は終了しています。

振り返ってみると、会員制度の特性を活かして多種多様な人材に活躍してもらえたとは思いますが、それをまとめるリーダーという面では、東博の牽引力が必要でした。NPOの今後の課題だと思います。

岡 田 それでは、国立科学博物館の山田さんをお願いしたいと思います。先ほど加藤さんがお話しになった牡鹿の収蔵庫というのは、支援要請リストに挙がっていたおしかホエールランドを見に行った際、当時、石巻市の文化財担当の木暮さんが、あの体育館の裏側に収蔵庫があったはずだと言って行ってみたら、それがあったと分かったものです。一方、ホエールランドは、大きな骨格標本が天井からぶら下がっている状態でした。

その後、岩手県山田町のクジラの標本なども見ましたが、今回の場合は三陸沿岸、漁業関係の資料館もたくさん被災しましたし、さらに生物関係の生態的な資料もありました。この討論会初日に「文化財等」という言い方を議論しましたが、旗を振った文化庁の美術学芸課が、直接には所管しない分野に対しての活動が行われました。

今まで民俗学、考古学、美術工芸的な技術者の話になっていましたが、救援委員会の構成団体として参加された国立科学博物館として標本などを扱われた現場での人材のお話をしていただければと思います。

山 田 科学博物館を代表してお話しするとなると、私自身があまりちゃんと分かっていなくて申し訳ないのですが、今日会場にいらっしゃっている真鍋さんたちと、化石標本、植物や藻類の標本、あるいは昆虫、さまざまな点で科学博物館はできるだけのことをしてきたと思います。今日の話題に関しましては、私自身が直接やったことだけに話を絞らせていただきたいと思います。



アンケート集計結果に少し書いてありますが、私が関与したのは大ざっぱに言うと二つです。一つは、岩手県陸前高田市「海と貝のミュージアム」にあったツチクジラの剥製標本です。もう一つは、宮城県石巻市鮎川の「おしかホエールランド」などの標本です。当初、鮎川はほかの機関で「面倒は自分たちで見えるから」という話があったので私たちは考慮に入れていなかったのですが、どうにかしないと駄目らしいということで、鮎川でも少し救出作業を行いました。それについては、3月下旬から岩手県立博物館の大石さん³たちが、悉皆的に海岸沿いの博物館、あるいは博物館的施設の総ざらいをしてくださっている中で、次第にいろいろなことが分かってきたからでした。

私は国立科学博物館でクジラやイルカを担当する立場にいまして、通常は、例えば海岸にクジラが打ち上がったときに、それを調べたり、標本として収集したりということをやっています。ですから、ある程度大きなもの、重さで40～50 t、体長で17～18mぐらいのクジラは何とか扱えるので、被災したクジラの剥製標本を救出することになりま

³ 大石 雅之：岩手県立博物館

した。

また、海と貝のミュージアムのツチクジラ剥製標本については、国立科学博物館はなかなか因縁があります。中国など、剥製を展示することがむしろ喜ばれる国があって、そういうところではクジラの剥製は決して珍しくないのですが、日本に10mクラスのクジラの剥製は他には全くないと思われます。ですから、剥製標本作製法、伝統的な技術などの面でも重要であるし、生物学的にも意義深いものです。そのツチクジラ剥製標本が被災しているという情報を大石さんから頂いたわけです。

当初はどこまでやるのか、あまりちゃんと考えていませんでした。とにかく行ってみるしかないということで、5月下旬に出掛けたところ、長い歴史の中でいろいろ都合があったのでしょうか、剥製標本でありながら外側をFRPでコーティングされていたのです。標本は完全に水没どころではなくて、流入する激しい寄せ波、あるいは引き波にもてあそばれた形跡がありました。それでも形を保っていたのはFRPコーティングのおかげだと思えます。

そういう標本をどうにかしなければならぬと思いました。昨今の風潮では、できるかどうか分からないけれどもやってみようというのは、あまり評判が良くありません。確かにできそうなことを、ちゃんとやるのは褒められることですが、やってみただけでも駄目でしたということは許されない世の中です。しかし、そのときの気分としては駄目でもいいから、とにかくできるだけやってみようということで出掛けたわけです。

1回目に見に行ったときの、現場はなかなか厳しい環境でした。また、建物自身もできることなら早期に壊したいということでした。標本を何とかして外へ出さないといけないし、出すとしたら補修作業ができるところへ運ばなければいけないということは、その時点で見えていました。2回目以降があるための、有り合わせの単管パイプとキャスターを使って仮設台車を作り、天井から吊ってあった10mの剥製をとりあえず仮設台車に移しました。

事前に付け焼き刃的に調べた範囲では、500kgクラスと考えられていたのですが、空っぽのクジラの剥製の中に、水も相当入っていたようです。結局、後で考えてみたところ、多分1tぐらいあったのですが、それを単管仮設台車に何とか移して、次回を考えようとしたのです。1回目に見に行ったときに、何とかある程度形を維持することはできるだろうと判断しましたので、2回目以降できちんと補修しようということで進んでいったわけです。

そういうことで、日ごろは海岸で生のクジラと対峙するメンバー数名と、そういうものを標本にする業者さん、それから、さまざまな有り合わせの道具で、何とかその場をしのぐ柔軟な適応力のある人を選びました。現場で利用できるのは、いろいろな素朴な道具、最も高度でチェンブロックぐらいの、それに腕力をちょっとプラスするということですね。そういう人選をして現場に向かい、何とかぎりぎり目的は果たせたかと思うのですが、それには自衛隊の方たちの筋力と組織力があつたことが大きな要素でした。

また、地元の博物館、岩手県内の博物館の方たち、海と貝のミュージアムをつくった初代館長さん、周辺の高校の先生など、地元あるいは周辺の何とかしたいという強い気持ちに後押しされながら、自分たち自身も科学博物館と縁のあるこの標本を何とかしよ

うと進んでいったわけです、今はつくばにあります国立科学博物館の施設でちょっと休憩中です。間もなく最後の補修作業を終えますと、今年度内には、われわれが考える出来上がりの姿になります。陸前高田に早く保管先ができて、このツチクジラ剥製標本をお返しできる日を待っているところです。

事は単純だと思うのです。いろいろな困難があつて、それをどうにかしなければいけない。けれども、さまざまな障害がある。それを何とか擦り抜けてきたと思うのですが、多分、そういうことが、今も地域全体で起こっていると思いますので、今後に向けて、そういうことも、うまく何とかこなしていける体系ができることを祈っています。

岡田 普段は波に打ち上げられたクジラを、標本として使うことを考えて、取りに行っているらしいですね。標本になったものを救うということは、今まであまりされていなかったのだらうと思いますが、いろいろな人の力を借りてということであったかと思えます。

自然史系の資料に関しては、会場にも何人かいらっやっていますので、後ほど具体的な活動についてお話しいただければと思います。

最後になりますが米村さんは文化財保存の専門家です。山形にある東北芸術工科大学に、文化財保存修復研究センターがありまして、普段から東北地方の文化財に関する立体造形、日本の絵画、書画の装こう、保存科学、それから油絵などの修復もなさっているらしいです。広い範囲で、学生さんを育てながら、修復活動も作業としてやっているといるところで、今回、山形は各県に対してかなり近い距離に位置していたこともあつて、非常に活躍されました。いろいろな場所のものを引き受けてくださっているわけですが、米村さんから人材についてのお話をお願いします。

米村 今、岡田さんから本学の特徴を少し紹介していただいたのですが、文化財保存修復研究センターという専用の建物がありまして、そこに修復と、われわれ保存科学の専門のスタッフと、それなりの設備がそろっています。当初から東北各県の作品を実際にお預かりして、修理・修復して返却するという活動をずっと行ってきていました。



また、大学の学部としては、美術史・文化財保存修復学科という名前を冠している学科があります。そこでは学生の教育の中で、先ほどの文化財保存修復研究センターでお預かりする作品の修理に実際に学生も一緒になって、場合によっては卒業研究などで、1作品を1年かけて修復しておりますので、そういった活動をしたと思っている若い人たちが集まってきていたということがあります。

当初の救援活動なのですが、先ほどの八木さんと同じように、われわれも何かしなければいけないという思いはありました。こういう立場ですので、ここで動かなければ、われわれの存在意義は全くなくなるので、やらなければならないという中で、なるべく積極的にこちらからは行かないように、要請を待つことにしました。意外と早く3月の終わりぐらいから、かなり問い合わせがあり、その中でできることからやってきました。

結果的に資料の一時預かり、応急処置という名目で、さまざまな作品や資料をお預かりして作業しています。というのも、特に修復家のスタッフが考える「修復」という言葉は、きれいにして展示できるところまでが修復だということで、とてもそこまでは

できないという話があったのです。恐らく、被災して依頼していただいていた方々は、きっとそこまで要求されていなかったと思うのですが、まずどこまでやるかということが、特にセンターの中でもいろいろ協議して、一つの方向性をつくるのに少し時間を要しました。

実際にお預かりしているものについては、大きく分けて美術作品と多くの図書資料なのですが、美術作品に関しましては、修復センターのスタッフと、その下におります学生で作業を進めています。ですから、外部の方々には入っていただく、あくまでもセンターと学科の中で作業を進めました。

平川先生⁴からお預かりしている額装品、それから石巻文化センターの彫刻作品等を多く受け入れています。実際に昨年度の学生の卒業研究などに取り入れて、応急処置を施したのに関しては、返却が既に済んでおります。また新たなものをお預かりして、現在も作業を進めています。額装品に関しても、基本的には応急処置をする中で、一部、補助金も頂いて仕上げるところまで行ったものもあります。

美術作品とは異なりまして、図書資料に関しましては、かなり点数が多いので、われわれもそのメンバーである2008年に立ち上がった山形文化遺産防災ネットワークと一緒に作業を進めています。われわれ文化財保存修復研究センター、学生も含めて、ある程度、修理などを専門にしている人間以外も、さまざまな行政の方や考古学の方、歴史学の方、そういった方々にもお集まりいただいて作業を進めています。

図書資料の作業には、まず乾燥処置があります。当初、海水に浸かっているのが塩を抜くのだと、抜く気満々でいたのですが、最初にお預かりした資料があまりにも多くて、実はその思いは一晩で変わりました。それはもうやめて、とにかく乾燥していこうという方向に変わっています。その乾燥に関しましては、とにかく応急的に送風などで乾燥したもの以外に、状態が悪いものに関しては凍結させて、本学のセンターにあります凍結乾燥機を用いて、順番に乾燥処置を進めているところです。去年と今年で、もともと大学でお預かりしていたものの風乾については終わっていますが、真空凍結乾燥は現在も続いております。

特に図書資料は他の機関と共同で作業しています。本学を中心に、山形大学、米沢女子短期大学、東北公益文科大学の方々とも手分けして作業を進めて、最終的にクリーニングが終わったものは米沢女子短期大学に集めて、そこで最終的に資料の点数や照合作業をしています。

最初に宮城県からお預かりしました農業高校の資料が約1,000点あるのですが、来年度の早い段階で、それに関しては、恐らく返却までたどり着けるのではないかと考えています。そのほか、陸前高田市や気仙沼市の資料に関しては、まだまだ時間がかかると思います。というのも、当初、比較的作業しやすい、状態がいいものから進めておりました、これから作業するのがどんどん難しいものになってきているのです。ですから、再来年ぐらいまでかかるかという状況で作業を進めています。

岡田 東北地方に拠点を置く文化財専門の大学、学科を持っていらっしゃるということで、山形県内を含めて、東北地方の被災各県との連携を実現していらっしゃる伺いま

⁴ 平川 新：宮城歴史資料保全ネットワーク（東北大学）

した。

今の米村さんの場合には、文化財保存の専門家を志している人がいて、そして学生さんたちも行っているということです。先ほど午前中のセッションでも、今回の活動を通じて、初めは経験のない人でも、だんだんにスキルを上げてきて、いろいろな作業ができるようになってきたというお話がありました。これは一般のボランティアの方もそうですが、とりわけ大学では先生がいて、その先生の指導の下にという枠組みが初めからあります。先ほど加藤さんから、仙台地方の学生さんが多いというお話がありました。今回の活動は、民俗資料、考古資料を中心としたものですが、学生さんたちにとって、地域の文化財資料がどのように目に見えてきたのか、何か変化をお感じになったことはありますか。

加藤 震災の当年は、もうひたすらクリーニングすることに終始したのですが、学部生はこういう経験を持つことが、後々、社会人になってから生きてくるかなという思いで指導しましたが、大学院生に関しては、かなり本気で学芸員を育成するつもりでやりました。

というのは、津波で被災した資料よりもひどい資料というのは、恐らく世の中にあまり存在しないので、これをちゃんとできれば、どこでもやれるぞと。そんなことはないのですが、それをスローガンに、特に現場監督的に位置付ける院生に関しては、途中からクリーニングの指示なども、最初は隣で見せていて、少しそれをやらせたり、整理作業や学生のコーディネートなど、あらゆる作業をやらせました。それは2年目、3年目と代替わりしていきます。実際、今年度から博物館で学芸員として働きはじめている卒業生も出てきています。

今年度になって、クリーニング作業をやっている途中から、学生からも声が出てきたのは、これはきれいにするだけでいいのですかということなのです。やはり民俗資料ですので、地域の人々にとって、これからどういう意味を持っていくのか、そもそもこの資料がどういう意味付けで収集されたのかとか、民俗学としては、どうしてもそういったところに関心が向いていきます。

ですから、その試みとして、それを陳列して聞き取り調査を始めたわけです。この展示の企画も、資料のピックアップも、パンフレットやパネルの文章を書くとか、あらゆることを学生主体でやらせています。博物館の学芸員の仕事の一部ということもあるのですが、それを通じて地域に直接関わっていく機会を少しでも持つことが、今の学生にとっては必要なことだと思っています。

というのも、学生一人一人の被災状況が全く違います。実家が流された子もいれば、仙台市内で無事だけれども、2～3日は避難所で暮らしたとか、親族を10人以上失っているとか、さまざまなのですが、非常に個別の経験の中で完結しているのです。例えば、実際に津波の被災地に出掛けていく機会は、仙台の学生にはほとんどありません。泥かきボランティアなど、幾つかの活動に参加した学生はいますが、もっと別の学生の自己実現にもつながっていくような形で、結果的に地域のコレクションにとって意味のある活動になるようなものを、学生と一緒に企画したいと思ってやってきました。

これは私が全部企画してやっているのではなくて、むしろ専門家ではないアイデアをたくさん取り込んでいって、地域の中にそれを位置付けていくことができたような側面

もあります。ですから、みんなで作るプロジェクトを震災後のこの時期に行って、その中で文化財に関心を持っていく、その子たちが卒業して社会に出ていく。彼らは、一般の人とは少し違った文化財に対しての認識を持つでしょうから、そういう面でのすそ野を広げる意味での人材育成と、学芸員を育てるという意味での人材育成と、2種類あるように思っています。

岡田 そういう意味では、これを経験した人たちが今後育って行って、また次に何らかの自然災害などが起きたときにどう対応するか、そういう人材にもなるかもしれません。

地域の人々ということでは、私たちが今回コーディネートした方々は、皆さん大学の先生で、会場にいらっしゃる方もそうなのですが、市民のボランティアの方々と活動された中で、技術的な問題がいろいろあったかもしれません。その活動を通じて、人々の意識がどのように変わっていったかということについて、何か情報を提供してくださる方はいらっしゃいますでしょうか。

天野⁵ 先ほどお話があったとおり、今、うちは主に地域外から集まったボランティア



が市民の方と一緒に、被災資料の救援、クリーニングをしています。うちの活動の中で一つ特徴的だったのは、そもそも文化財や歴史というものに必ずしも興味のある人だけが中心に入ってきたのではないことです。その活動を通して、歴史資料は何なのかということをも市民の中で共有できました。それをきっかけとして歴史と文化というものに興味を持てたことが、われわれの中で成果としてあるのだらうと思っております。

今後、それをどういう形でつなげていくかということが、今度はわれわれの課題になってくると思うのですが、例えば参加した地元の人たちと一緒に、古文書を読んだりすることを通して、地域の歴史をどうやって残していくのかを今模索しているところです。

岡田 自然史系の方で、歴史資料、民俗資料的なものではなくて、その土地の生態学的な特徴などに関して活動された方は、限定されますが、地域にとっての資料という形で今救出されて、これから伝えていこうとする辺で感じたことをお持ちの方はいらっしゃらないでしょうか。

鈴木さんの活動では地域のボランティアの方も参加されて、私が拝見した限りは、昆虫標本などの整理をされている方々がいらっしゃいました。そういった方々が、今後、これを自分たちのものとして伝えていこうというような、その意識の変化というか、そういった思いを、感じられましたでしょうか。

鈴木⁶ 地域という言葉の指す範囲がいろいろだと思うのです。「陸前高田の」「山田の」



という、被災地域から活動に加わられた方々は、本当に一握りなのです。でも、彼らにとっては、彼らの住んでいる町の資料であって、それは自然史資料であっても歴史資料であっても、価値は同じものです。

岩手県立博物館は盛岡にあって、われわれのレスキュー活動は盛岡がほとんどだったのですが、そこで盛岡の大変多くのボランティアの方々に集まっていただいて、今も活動は続いています。そういう方々にとっては、広い意味で「岩手

⁵ 天野 真志：宮城歴史資料保全ネットワーク（東北大学）

⁶ 鈴木 まほろ：岩手県立博物館

県」という地域にとって言えば、こういう財産が岩手にはあるのだということを再認識していただく、非常に大きな機会であったと思います。それから、自然史資料というものも歴史資料と同じく、あるいは民俗資料と同じく、地域の宝であるということを認識していただく機会にはなったと思っています。

岡 田 今、私が一番あっと思ったのは、被災した海岸付近の町の方々は大きな被災をしていて、そういった方々が、必ずしもこの活動の直接の人材にはならないのだということです。私たちは地域の方々と一緒にやりますし、われわれ外から行った人間同士と一緒に活動させていただくこともあったと思います。

私たち救援委員会というのは、多くの場合、外部から入ってくる人が構成団体という形になるわけですが、今回、あらためて感じますのは、それぞれの地域の方々がどのぐらい参加されるかということが、この活動の出発、途中、これからを考えていく上でも、非常に大事なことなのだろうと強く思いました。

私どもが少し大学の先生方に偏って人選させていただいたのは、この活動を通じて、学生さんたちが、恐らく地方の大学の場合、特に地域とのつながりということ、そこで学ぶこと、そして、そこで学んだことをそれぞれの生まれた場所に戻って、あるいは別の土地へ行って、どう社会に活用していくかということが求められているのだと思ったからです。文化財の分野で言うと、各地域の文化財ということを非常に重視する傾向がこのごろ特に強くなっているものですから、ついこのような切り分けをさせていただきました。

菊 地 今までのお話を伺っておりまして、確かに大学として地域に貢献する人材を育成することは大事なことだと思います。これは私個人もこれから取り組んでいきたいと思っているのですが、特に初日の討論会で保存環境などのお話を伺うにつれ、やはり危険な部分を学生にしっかり伝えていく必要もあるのではないかと強く感じるようになりました。

確かに、被災した文化財等を救出して、元の状態に戻してお返しすることは大変重要な仕事ではありますが、大学として人材を育成するということは、ある意味、リーダー的な立場の人間を育てるということでもあります。その場合に、このような活動が大事だということは、もちろん指導していきますが、その一方で、カビへの対応のように、さまざまな危険なことや、やってはいけないこともあるのだということも、しっかり教えていかないと、中途半端な人材育成につながってしまう恐れがあるのではないかと考えた次第です。

岡 田 そこは、まとめとして完全に欠けていました。やはり文化財、あるいは「文化財等」となっていますが、資料の形態を保ちつつ、持っている情報を正しく少しでも残していくというところでは、いろいろな高い技術を使わなければいけません。しかし、一方で、自然災害等によって被災していることで生じている危険な状態もたくさんあります。そういったことについては、今日の話はどうしてもボランティアや学生さんといった人材に偏ってしまいましたが、やはり高いレベルを持って、専門的に技術を示し、発揮する人が必要だということは、間違いのないところだろうと思います。そういった方々と、今日私が少し強調して申し上げた地域の人々が文化財を守っていくときに、一般の方々も含めて参加する場合には、どういう体制をつくっていくかということが大切

になるのだろうと思います。

山田さんは、クジラがいつ陸前高田に戻っていくのか心配しておられます。被災した施設は昨年秋に全解体していますので、新しい施設を陸前高田市が建てるには、まだ時間がかかるだろうと思います。石巻市もこれから被災施設を解体するということです。まだまだそれぞれの大きな施設、小さな施設もそうですが、完成までには時間がかかるだろうと思います。午前中のお話にもありましたが、そういったものを伝えていって、町の復興、人々の復興にどう結び付けるかということも課題として残っていますが、このセッションはこれで終わりにさせていただきます。